

巖念寺だより

春彼岸号/令和3(2021)年



題字 大塚婉嬢 書

菅原 篤 画

●「ケネス・タナカの仏教教室Ⅳ」始まる
ケネス・タナカ先生（武蔵野大学名誉教授）を講師にお迎えし、内容も新たに第五期仏教入門講座「ケネス・タナカの仏教教室Ⅳ」が四月より始まりまます。昨年度同様、オンライン（ZOOM）にて実施します。ご関心のある方は是非ともご参加ください。（巖念寺公式サイト：<https://www.gonnenji.com/>参照）

●『ケネス・タナカの仏教教室Ⅳ』出版！
昨年に巖念寺で実施されたケネス先生の仏教教室第四期目の内容が本になりました。仏教に関心のある方は一読されることをお勧めいたします。
サブテーマに「仏教心理学―縁起の主体で生きる」とあるように、心理学に興味のある方や初心者でも分かりやすい内容です。
ご希望の方は巖念寺までお申し出ください（無料）。



■木目込み人形（作：高旨良子さん）

●ご懇志御礼
昨年末から今年にかけて、次の方々より特別にご懇志を賜りました。心より御礼申し上げます。（順不同）
燧よし子様/山下忠一郎様
七島意明様/増野裕子様
神谷豊久様/伊東一枝様
浅沼隆様 その他

●ご奉仕・ご奉納御礼

昨年末から今年にかけて次の方々よりご奉納をいただきました。心より御礼申し上げます。（順不同）
櫻井忠雄様/川上よし子様/田村洋・恵子様/高旨良子様
幸保美和子様/浅沼隆様 その他

●子ども支援御礼

次の方々から「子どもフードパントリー（困窮する子供を抱えた家庭への支援活動）」へご寄付をたまわり誠に有り難うございました。なお、今後も毎月一回のペースで、巖念寺にてフードパントリーを継続してゆく予定です。引き続き皆様からのご支援・ご協力をどうか宜しくお願い申し上げます。
（十二月より一月末現在/順不同）

- 秋谷えみ子様/聖徳寺（横井徳恵）様/小野英彰様
- 常田幸子様/増野裕子様/吉村奈都子様/松下祐也様
- 佐藤光則様/山崎真由美様/縁の木（白羽）様/大橋瞳様
- みどり薬局様/新井寛様/佐久間明夫様/藤井かおる様
- 真行院様/倉品武文様/木下睦子様/松永玲子様/小柳幸様
- いわずな書店様/牛山正子様/藤原正哉様/安倍幸子様
- 富田和子様/久野佐和様/井上健治様/矢崎修・有里様
- 岡宗一郎様/松本美智子様/大久保早苗様
- 大河原眞佐子様/幸保美和子様
- 赤塚紗弥可様/磯辺智一様/増原麻衣子様
- 齋藤裕子様/勝木尚様/田平浩文様
- 杉尾尚子様/広部潤様/水谷修三様
- ロージブルー様
- 東京文化ライオンズクラブ様
- 浅草たい焼き工房『求楽』様
- その他（匿名多数）



●春彼岸のお知らせ

●春のお彼岸は三月十七日（水）から二十三日（火）までの一週間です。巖念寺では、昨年の春彼岸から正面入り口に「お釈迦様の誕生仏」を安置して一年になります。今では、コロナ禍の中で「手を合わせる場所」として、お檀家さんはもちろんのこと、近隣の多くの方々がお参りにいらっしやる大切な場所となっています。
四月八日は、お釈迦様のお誕生日「花まつり」です。誕生仏に甘茶をかけてお祝いいたしましょう。

また、三月二十日（土）・春分の日はお中日ちゅうじちといって、お彼岸の中心になる日です。当日は午前十一時から本堂にて彼岸法要をお勤めいたします。どうぞお参り下さい。その際にご希望の方はお位牌・過去帖などをご持参ください。

●コロナウイルスの影響で墓参をやむなく控えている人のために、お彼岸期間中に墓前に生花とお線香を供えての「墓前読経」を承っております。ご希望の方はお寺までご依頼ください。

●三月二十一日（日）の午前九時半頃から、ひばりが丘の墓地での墓前読経を承ります。ご希望の方はお早めにご連絡下さい。

【巖念寺 電話：03（3844）9383】
お彼岸という節目を私たちにとって大切なひと時にいたしましたしょう。



合掌

電話：03-3844-9383 FAX：03-3844-9393
E-mail：gonnenji1253@gmail.com

巖念寺 〒111-0042 東京都台東区寿1-11-2
<http://www.gonnenji.com>



によじつちけん
如実知見くあるがままを知るく

三月はお彼岸の時節です。

お彼岸は、春分・秋分の日を中日として、前後三日間の一週間をさし、その間にお墓参りをするのが一般的です。地方によっては、お彼岸に住職が檀家さんの家のお仏壇をお参りする慣習のところもあります。

お彼岸はお盆と共に、先祖や亡き人と向き合い、供養する大切な機会です。でも、その胸のうちは一人ひとり違われることでしょう。

お寺の「よるてら」のGIRU

昨年、厳念寺の「よるてら」に一人の男性が来られました。

「よるてら」はこの厳念寺だよりもご紹介したとおり、副住職が上智大学グリーンフケア研究所で共に学んだ仲間と、一昨年の秋から始めたお寺の活動です。活動の意図は、「お寺が身近にある生活を感じてもらおう」で、内容は多忙な現代の人々に本堂で「ひとりの時間」を持つてもらおうというものです。

毎月一回、夜七時から九時まで本堂を開放し（緊急事態宣言下は休止）、コーヒーなどを提供する以外は、静かに心を落ち着けて本堂で過ごしていただく。ただそれだけの取り組みですが、仕事帰りなどにふらっと足を運ばれる方が少しずつ増えています。その男性は初めて来られた方でした。本堂

涙がこぼれ、孤独が募りました。

でも、周囲は独りにしませんでした。友人、近所の人、それに間法仲間がなにかと声をかけ、Aさんはそんな人たちに手をひっぱられるように、外に出るようになりました。同じように伴侶を喪った人がいて、悲しみを分かち合う場も持つことができました。そんななか、Aさんは気づいていかれたといいます。「予測していたことも、そうでないことも含め、あらゆる縁のなかで自分が生きていたのだ」と。

変化はどこにあったのでしょうか。

死別の悲しみのなかにいたAさんは、旦那さんとの別れに心が奪われ、喪失感から人生を未来に見出すことができなかつたのだと思います。けれども毎日、心のなかで旦那さんと向き合い、縁ある人とかかわりあいながら日々を過ごすうち、亡き旦那さんと共に過ごした過去から今に至るつながりが、今のAさんを支えてくれていることに気づかれたのです。そして今、この自分のいのちを支えている「縁」の網目は、生きている友人知人だけでなく、縁を作ってくれた亡き旦那さんや、両親にも続いていたことに思い至られたといえます。その瞬間、それまで悲しみに覆われて見えなくなっていた、Aさんのいのちが照らされたのです。

Aさんの力強いところは、そこからもう一歩進まれたことでした。

自分を生かしている縁を生きようと、自覚的に歩みだされたのです。それが「縁を生きる」で、受動から能動への転換です。

出会いも別れも含めて、縁を支えるかけが

で小一時間ほど過ごされていたでしょう。帰り際、少し言葉を交わしたところ、実は最近、伴侶を亡くしたばかりなのだと言及し打ち明けられ、こう語られました。

——葬儀も終わり、納骨も済んだけれど、まったく悲しみから立ち上がることができない。日中は仕事でまだ気持ちがまぎれるけれど、家に帰ると、いつも待っていてくれた彼女がいない。その不在がたまらなく寂しく、毎日、家に帰るのがつらい。いつも厳念寺の前を通って仕事に行っているが、お寺の掲示板で「よるてら」を知った。今日は本堂で過ごせたことで、すこし気持ちがいっしょよりも落ち着けた気がする。



■厳念寺「よるてら」の様子

長年連れ添った伴侶を失った友人

Aさんは、私の間法仲間（仏教の教えを聞く仲間）の一人です。都内のお寺で開かれていた法話会（仏教の話や聞か）をよく顔を合わせ、親しくなりました。

いつもご夫婦一緒に、法話会あとの懇親会にも必ず参加されていました。Aさんの旦那さんは寡黙でしたが、穏やかで優しくそんな人柄がにじみ出ていました。Aさんは、元気で明るい方で、旦那さんのことをいつも慕っておられました。

えのない「私」のいのちを生きていこうという、あたたかい思いがAさんを包み、またはつらつとした笑顔が戻ってきたのだと思います。

如実知見くあるがままを知るく

《悲しみを、通さないと 見せていただけない 世界がある》

これは厳念寺の掲示板「今月のことば」に昨年十一月にご紹介した浄土真宗僧侶・東井義雄さんの言葉です。

私たちは平生、なかなか、自分が生きているその事実について、じっくり思いを馳せることができませぬ。見えている、分かっていると思っていることは、実は一割ぐらいなのかもしれない。けれども、離別にとどまらず、自分の存在をゆるがすような出来事が生じた時、初めて気づくことがけっこうあります。

私に関していえば、コロナ禍で脳裏によみがえってきたのは、むかし可愛がつてくださった今は亡き臨濟宗の尼僧さんの言葉です。「太陽も、水も風も、私たち人間が生きているためには欠かせないものなのに、請求書を送ってくることがないわね。私たちはけっこうづくめを生きていることに気づかないのよ」

けっこうづくめを生きている事実を目を背け、欲望優先で世界が動いてきたから、今回のようなことが引き起こされたのだろうかと、空を見上げながら考えていました。

仏教には「如実知見」という言葉があります。あるがまま、事実（真実）を事実のまま見る智慧のことです。ここでいう「あるがまま」とは、それまで自分の思っていたなか（自己中心的なまなざし）で見えているまま、とは違つたのでし

した。

ところが一昨年の初夏、そのAさんの旦那さんが急逝されたと言及してに聞いたのです。夫婦仲睦まじかった姿と、元気とはいえ七十歳目前にAさんが独居となったことに、心配が募りました。

四十九日忌にあたる頃に、Aさんと会う機会がありました。「旦那さんのこと、聞きました」と声をかけたと言及、「そうなの……」と、その場で泣き崩れてしまわれました。私は、背中をさすることしかできませんでした。年が明け、春が近くなつた頃に、Aさんと久しぶりに食事をしたと言及、その頃も旦那さんのお話をすると涙ぐまれていました。少し変わったかな、と感じられたのが、一周忌を過ぎた頃でした。

Aさん宅で、やはり間法仲間のおじさんと共に食事をしていた時のことです。お酒をいただきながら、楽しく談笑していると、Aさんがふと、嬉しそうに言いました。「縁なんだね」

Aさんは、しばらくしてまた、「縁を生きているんだね。ようやく最近わかったよ」

今度は力強く、かみしめるように言われました。その言葉に、私ははつとさせられました。

「縁を生きる」とは何が

旦那さんを亡くされたあと、Aさんもまた思い出のたくさんつまった家に住むことが、つらくて仕方なかつたそうです。買い物に行く道すがら夫婦がよく通つた店を見るたびに

う。先ほどのAさんのお話でいうと、旦那さんが亡くなつたことは変わらないけれど、自分のいのちを生かしている「事実」に気づいた時に、目の前の世界はそれまでとは違つて見えたはずなんです。そのまなざしを自らのなかに持てた時、悲しみは悲しみのなかだけにどまらず、不安のなかに苛まれるだけでなく、私を支えるものを見つめ直していく力が湧いてくるのではないかと思ひます。

そこから、どのように生きるかは、私たち一人ひとりに問われていることでもあり、仏様からかけられている願いでもあります。

コロナ禍の二度目のお彼岸

お彼岸の「彼岸（かなたの岸）」とは諸々のとらわれから解き放たれた悟りの世界のことです。聖徳太子の頃から始まつたともいわれる彼岸会（ひがんえ）は、このお彼岸の七日間に修される行事で、彼岸（悟りの世界）に向かう仏道精進（真実の生き方）に出会つていこうと励むこと（のためのものとも解されるそうです）。



コロナ禍で二度目を迎える春のお彼岸。不透明な時代ではありますが、本堂や墓前、仏壇の前で、亡き人や先祖をしのびながら、過去・現在・未来のつながりから照らされる「今、この身」をじっくりと見つめるひと時にしたいだけななと思ひます。

お寺はいつでもお待ちしております。合掌（新坊守・ちひろ）